

命の蔓

赤石 聖治

(一) 滑落

冬木立の灌木林のヤブを漕いで沢身に下りようとした。標高差は二〇〇メートルもないが等高線は詰まってかなりの急坂である。灌木の幹を両腕で支えながら、足元の枯れた藪草を踏み分けての急降下である。足下に流れが見えたと思ったその一瞬足が宙に浮いた。咄嗟に左手の指先が直径四センチ位の蔓をつかんだ。あつという間に全身が空間に投げ出され両手で蔓をつかんだまま宙吊り状態になった。「危ない」！これは命取りになるかもしれないという思いが脳裏を掠める。宙吊りのまま頭上を見上げると左右に広がる一枚岩の壁は一メートル余り上でオーバーハングして被っている。その岩壁と胸元とのギャップは約三〇センチ、直下は目の位置から五メートル弱はあるだろう。この真つ黒なスラブの岩壁は北向きのためおそらく一年中日が差さず、湿り気を帯びて不気味に光っている。背後の沢はかなりの水音を立て左手下に流れている。何万年もの間水流がこの岩壁を抉っていったのであろう。下に向って緩やかに湾曲し、渇水期の今は水際から四〇センチ位が棚状に水面から出ている。足先からその棚まで三メートル以上あるように見える。しかし、なんとしてもそこに最小限の衝撃で着地しなければ、この絶体絶命の窮地から生還の見通しは立たないと判断した。背後の沢はおそらくゴロ口状でどこに岩が突き出しているか分からない。かといって水の中に落下することは、その後の体温の消耗からたちまち命取りになることは明らかだ。また後頭部を少しでも岩に接触すればこれまた致命傷となる。活路の選択肢はきわめて狭い。これだけの判断に何十秒かを要したと思う。蔓を少ししごいてみる。少しでも落下の距離を縮めたい。二、三〇センチずり下がったかも知れない。次の選択はどのような方法でソフトランディングするかである。落下の速度を最小限に抑えることである。背中の荷物が一〇キロ近くある。宙吊り状態なので荷物を外すことができない。ぶら下がっている握力が残っているうちに行動しなければならぬ。冬装備で上下の下着は厚いくだのシャツ、その上に厚手のウエア、更に防寒用のフリース、下は厳冬期用のニッカーズボンを履いている。それにかなり厚手の毛糸の手袋をはめている。目の前の岩壁はまったくの一枚岩でクラックは全くない。全ての岩角は水に舐められて丸みを帯びている。足場になり

そんな突起はない。そうとすれば岩肌に取り付いてフリクションで滑り落ちて、その速度をできる限り抑えるのだ。息を大きく吸い込んだ。運を天に任せてまず右手を強く岩肌に押し付ける。ほとんど同時に左手指の蔓を離して岩に吸い付くように貼り付いた。両足の登山靴先端のビブラムも力いっぱい岩肌に擦り付ける。肩をすくめ全身を鞠のように縮めて落下する。右手指先が熱くなる。その速度が早いのか遅いのか分からないまま、ずるずると一メートル余りずり落ちていく。

## （二） 藪山

このところ四、五年冬場は二千メートル以下の中低山の藪山をやっている。多くはパートナーのSドクターと同行するが単独のこともある。山域は概ね南ア前衛の安倍川流域の深奥部である。平成一五年一月一三日、朝六時前、日帰り予定の装備で家を出る。乗り慣れた四輪駆動車エスクードで県道静岡・梅が島線を北上する。今日の目標は前年の冬、南側の仙俣川を詰めて登ったアツラ沢の頭（一五一一）の北側に幾筋かに分かれる尾根の中で三郷川の両岸沿いの尾根に入るつもりであった。地図は二万五千分の一湯の森である。湯の森のバス停付近を左折して林道に入る。三百メートル奥の三郷の部落を過ぎるとその先に人家はない。地図上では造里に一軒家があるが今は廃屋である。昔はそこから安倍西山稜を越えて井川村とを結ぶ山道があったのであろう。林道工事が延びたためか最近はこの辺りの山には人が入った気配はない。午前七時半装備を整えて歩き出す。取り付きからひたすら登って尾根を掴まえ、あとはそれを忠実に辿ればよい。取っ付きの藪で雪山用の手袋をどこかへ落としてしまった。一気に登った一一二〇のピークでそれに気が付いたが後の祭りである。薄手の手袋で足りたのでザックのサイドに挟んだのが失敗であった。幾つかのアップダウン越えて一三〇八に届くと雪が現れた。高度を上げるにつれて雪が深くなる。一四〇〇辺りで斜度の厳しいトラバース箇所があり念のためアイゼンをつける。一四五三のピークを遮二無二登り、更に一登りで主稜線に出る。この辺りの尾根は広い。北に向えば井川峠（一六六〇）、南下すればアツラ沢の頭を経てリバーウエルスキー場である。稜線上は積雪三〇センチを越えている。明るい冬晴れの日差しが雪に照り返して眩しい。人っ子一人いない。近くにキャンプ場があるので夏から秋は人声が絶えないところなのだが、森閑として静寂そのものである。この深雪のため三郷川右岸沿いにある尾根筋が掴めない。仕方がないのでアツラ沢の頭から急な尾根をしばらく下

り、緩くなつた所で北寄りに下っていく。急斜面のため下り過ぎ、朝迎つた三郷川左岸の張出し尾根の長い稜線が確認できない。再び左へ登り返し気味に下っていくと前の年、込岳への尾根探しに苦労したときの見覚えのある地形が、小さなガレ場の下に見えた。複雑に尾根が絡んだ明るい窪地で、微かな水が滴り落ちている。この水はずっと下流で三郷川の本流に繋がっている筈だ。何故なら南は込岳（一三〇九）から二王山（一二〇八）の長い尾根に阻まれて沢が流れ込む隙間はない。とすれば左の斜面を登りきつて尾根に出れば、それが三郷川右岸の尾根になる。時刻は午後二時を回っている。一息で登ると沢の瀬音と共に対面に、朝方歩いた起伏のある稜線が左岸沿いに長々と下方に続いている。尾根を忠実に踏んで下る。標高差約五〇〇メートル、かなりの急坂である。やがて右下から小さな瀬音が聞こえて緩やかな下りとなり、間もなく左からの本流と出会う。尾根の取っ付きに小さなケルンが積んであった。本流を飛び石で渡って石洞を潜り、しばらく沢筋を下っていくと左側に林道が現れた。車はここまで入れたのかもしれないと思ひながら林道を下ること一時間で駐車場所に着いた。午後四時半であった。林道は二箇所ほど落石で結局通行不能であった。行動食をとりながら歩程九時間であった。この日からまる一年の月日が流れた。

### （三） 谷底の夜

微かに瀬音が聞こえてきた。登山靴を通して右足首の下がひんやりとしている。ぼんやりとした意識の中で目を開く。まだ明るい。目の前の岩の間を沢水が激しく音を立てて流れている。足元の流れは緩く五〇センチほどの一段下の落ち口に落ち込んでいる。眠っていたのであるうか？ 時計の針は、午後三時半を回っている。先刻尾根から沢に下り始めたのが午後二時過ぎであったから沢に落ちてから三〇分以上の意識のブランクがある。五〇センチもない岩棚の流れすれすれにザックを置き、両足で抑えて右足が少し流れに漬かっていた。右脇にはストックがある。沢の左手の上流は三、四メートルの滝が二手に分かれて落ち込み、太い流水が何本か岩に食い込んでいる。座り込んでいる背後は一枚岩の壁が下流に向つて二〇メートルぐらい続いている。対岸は高さ二、三メートルの岩がぎっしりと埋まり灌木が岸近くまで茂っている。ここは右岸のみがゴルジュの暗い谷の底なのである。見上げると空は狭い。先ほど明るさを感じた空は次第に雲が厚みを増している。予報によれば夕方から雨又は雪であった。虚脱感から立ち上がる力

がない。ここまで状況を把握した上で全身に打撲、切傷を感じた。今から林道まで沢を下りきるには時間が足りないことは明らかである。念のため家人に携帯電話のメールを打った。「どうも遭難したらしい。Sドクターに連絡して下さい。ここは三郷川上流の谷間です」。しかし案の定圏外で連絡不能であった。視界が不明瞭なのに気づいて眼鏡を探したが、落ちる途中で碎け散ってしまい破片さえ見当たらない。右手で顔を撫でると左目の付近にかなりの出血の凝固がある。三メートルほどの下手に一人一人がかるうじて横になれるスペースがある。ザックから断熱材の敷物を取り出して敷こうとしたが上手くいかず諦めた。急速に明るさが失われて日暮れが迫って来る。ポツリと雨だれが頭に落ちた。雨具を取り出してフリースの上に着込む。スペースがない上に足が思うように動かないためズボンははけない。その時になって、登山靴以外は水に漬かっていないことに気が付いた。着地した際に沢に飛び込まなかったのである。そして岩壁に向かい合わせて落下したのに、意識を回復したときは沢のほうに向いて蹲っていたのである。記憶は落下の途中で切れてしまったが、恐らく着地した後、体勢を整えた安堵から意識を喪失してしまったものと思われる。若し落下の際水に漬かってしまったら、夜に入ってから気温の低下で体温を奪われてしまったに違いない。ただ手袋は岩壁との摩擦で指先がめくれて元に戻らず、しかも両手の指が擦過傷で膨れ上がり、何度試みても半分以上指が入っていなかった。これ以上のダメージを防ぐためには指先の凍傷を避けねばならない。雨具では薄いのでフリースのポケットに両手を入れて冷えを防ぐことにする。次第に夜が迫る。雨はやがて雪になった。オーバーハングの岩壁が庇になって濡れることはない。頭上から小石が転がり落ちる音がする。そして沢面に落ちた。次いで拳大の石が目目の前の水面にドボンと鈍い音を残して沈んでいく。ヘルメットはないが頭への落下をオーバーハングの頭上の岩壁が護ってくれる。一時の後小石の落下はやんだ。行動食のドラ焼きで腹を持たせ、目の前の水をコップですくって飲んで脱水症状を防ぐ。昼間の疲れから眠気を催して来る。明日の朝明るくなるのを待ち、一日かけて林道まで下るしか生還の道はない。窮屈なので時々姿勢を変えるが、結局ザックを前に両足を上に乗せる形が最も安定する。うつらうつらと半覚醒のまま時が過ぎていく。寒さも痛みも感じない。ひたすら明日に運を賭けるしかないのだ。黒ずんでいた沢の向こうの岩が雪を被って目を覚ます度に白さを増していく。対岸の裸木

が枝の先まで白くなって、夜が明けたかと錯覚する。激しい瀬音が時々すーと耳から消えて行く。ここは人跡稀な自然の深奥部である。ふと、ここにいることの表現しがたい充実感に満たされる。四〇年近い山登りでいく度かの危険に晒されたが、結果的に危険は回避され表面化しなかった。ピークを踏み歩いたことも、雪山を彷徨したことも、マイナス一〇度の吹雪をじっとテントの中で耐えたこともある。しかし、ここ五、六年とにかく静寂な自然そのものに直接近づきたい欲求が強くなってきた。山の高さでもなく、形でもない、頂上を極めなくてもよい。ただ自然の深奥部に入り込むことによつて得られる、甘美なまでの精神の充実が何物にも代えがたいのである。田部重治が言つたように山に登るということは、人知れず山の中に寝ることなのだ。人は言うかもしれない。「登山道もない、人もいない自然の奥深くに危険を冒して入って行く、そのような行為に一体どれほどの価値があるのかと」。自然は崇高である。その崇高さへの憧れである。この憧れが今の私の生きる糧なのである。しかしこれは一般的には理解し難いことなのかもしれない。

#### (四) 生還への脱出

何回かのまどろみを重ねるうちに少しずつ夜が明けてきた。雪は一五センチほど積もった。雪の白さが夜明けを促したのかも知れない。午前七時を回った。いながらにしてコップですくって沢の水を飲む。うっすらと氷が張っている。大福餅を食べる。好物の行動食である。ラーメンを作れたかったのだが、ライターを二個ともザックの中で水に濡らしてしまつてガスが着火しなかった。若し体に損傷がなければ四時間とはかからないで林道の端にたどり着けるだろうが、この状態では倍の時間を見ておかねばなるまい。相変わらず手袋は使えないが、すべてをザックに詰め込んで背負う。左肩があがらない。強引に腕を通して肩へ押し上げる。濡れたザックは重い。ストックを支えに立ち上がろうとしたが、左足の踏ん張りが利かない。しかし、この暗い谷底から脱出しないことには恐らく生命は維持できないだろう。痛みは吹き飛んだ。雪は止んでいる。天気は回復の気配である。午前八時、渾身の力を込めて一步を踏み出す。両手は素手である。時には沢水に漬かりながらだが、今は冷たさの感覚もない。昨日の午後二時過ぎ、去年の右岸の尾根を容易に捉えたのに気をよくして、沢身に下りて少し偵察しようとしたのが事の始まりであつた。右岸沿いの尾根をもっと下ってから、登りに見た

三段の滝の上辺りに出るつもりが、地図の確認を怠ったため、結局はずっと上部の沢に落ちてしまったのであった。兩岸の岩をへつりながら、なるべく深みに落ち込まぬよう慎重に下る。裸眼なので足元をじっくり確かめてから、ストックで支えながら体を下の岩にずり落とす。これ以上の損傷を負ったら致命的となる。二、三箇所の小滝でどうしても水に入らなければ下れない所があった。休むたびに水を飲むのだが、次第に脱水症状がひどくなって唾液が出ず、ドラ焼きの皮が喉に詰まってしまうようになった。後はチョコレートしかない。昼過ぎて再び粉雪が舞いだしたころ、頭上でヘリコプターの拡声器が聞こえた。内容は分からないが、搜索が開始されたのではないかと思った。しかし、沢筋の空は狭く雲に覆われて機体は見えない。ゆっくりではあるが立ち止まる程度の休憩のみで六時間くらい下った。沢が明るく開けてきた。あと二時間くらいで滝を巻いて川原に出るだろうと思い岩に腰を下ろしてザックを外し、水を補給してチョコレートを二粒口に入れた。その時沢の一段下のほうから人声がした。直ぐ「セイさん、セイさん」という呼び掛けが左右の尾根にこだまして聞こえてきた。「おーい」と呼び返す。五分もしないうちに静岡中央警察署山岳救助隊員の姿が沢の下から現れた。四人の隊員が交々「セイさんですか?」と確認する。「ご苦労さんです。お世話になります」と答えたつもりであったが、後から聞くと声が擦れてしまつて余り声にならなかったようである。時に午後二時一〇分であった。因みに救助活動はその日午後三時までで打ち切る予定であったという。落下地点で動けなかったり、自力下山を試みなかったら発見されないままであったかも知れない。生存への架け橋が繋がったことで、今まで維持されてきた体内のエネルギーが急速に失われてしまった。ヘリでの吊るし上げは風が強くて危険とのことで、隊員に背負い袋で背負われて下ることになった。後日回収することにして荷物は全てその場にデポする。四、五〇メートルずつの四人交代だが、滝を巻く下りは猛烈な急坂で隊員諸共に転げ落ちそうであった。二時間近くかかってようやく林道末端に待機していた救急車に運び込まれた。その時体温は三二度五分まで下がっていた。安堵から意識が薄れかかっていたが、「お父さん」という娘の呼び掛けが今でも耳の底に残っている。静岡済生会病院の緊急処置室に到着した時は午後七時を回っていた。そこでの当初の診断は右膝蓋骨折、全身打撲、脱水症、顔面、両足、両腕擦過傷であったが、その後の何回かの検査の結果左上腕骨結節骨折の

手術が加わった。そしてその日から一ヶ月余りの入院治療の身となったのである。

今回の遭難では、Sドクター、家族、警察の山岳救助隊、警察犬等の協力によって運良く一命を取り止めることができた。若し滑落寸前に咄嗟に掴んだ木の蔓が、枯れていたり、細くて体重を支えきれなかったとしたら、下降への勢いで沢にダイビングして岩に碎け散る無残な結末であったことだろう。まさに生死の境は紙一重である。日ごろ、心身一元を認識して行動していたつもりであったが、私の生死の観念は多分に精神に傾いていた。それはまず身体にこそ抛らねばならないことを身をもって知らされた。

(二〇〇四、二、二〇)

註 オーバーハング（下から見て岩壁が庇状に被っていること）

ゴロ状（大小の岩がごろごろした沢の状態）

トラバース（斜面を横切ること）

アイゼン（先端が鋭く尖った鋼鉄の爪が付いた金具で登山靴の底にバンドで締付ける。爪は六本から十二本ある。）

ケルン（石を積み重ねた道しるべ）

ゴルジュ（左右の岩壁が迫っている暗い谷底のこと）

スラブ（一枚岩のこと）

へつる（岩の縁を伝わりながら歩く）